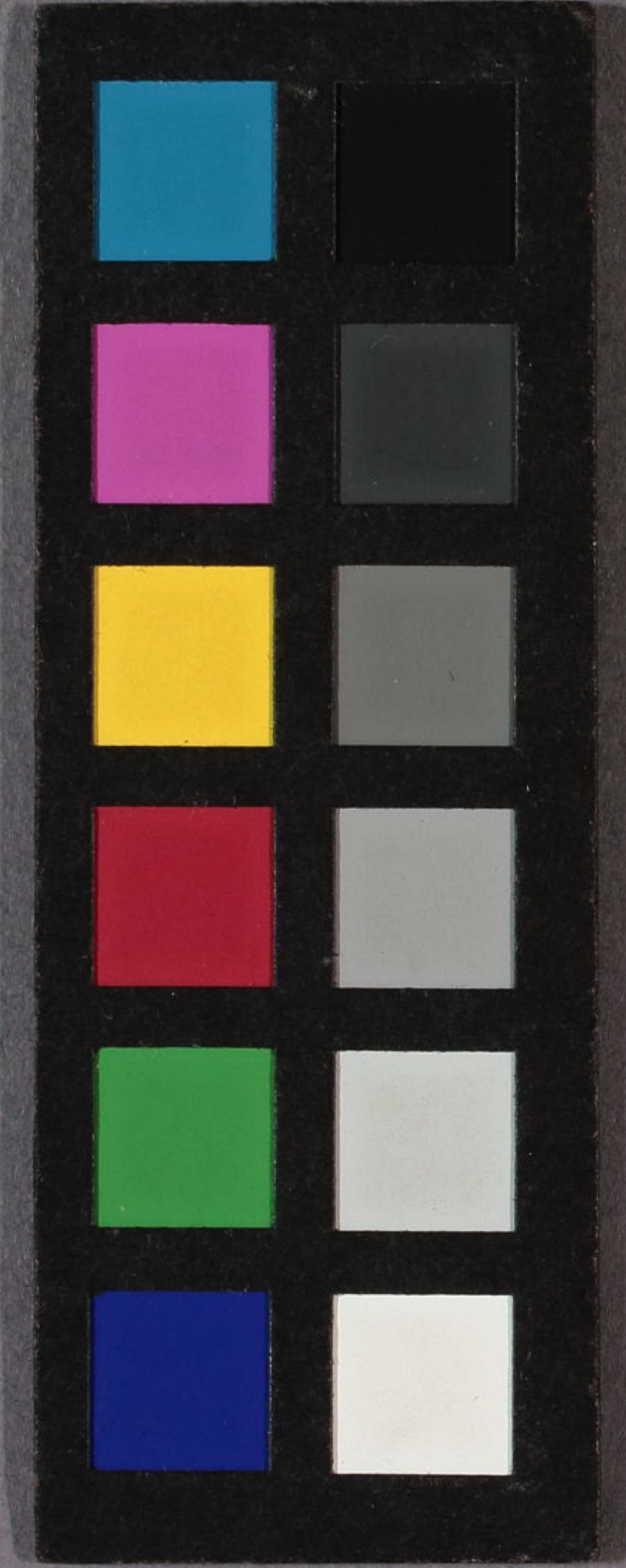


掌中蓼太發句集

編二

全



掌中夢太發句集二篇

春之部

歳旦

初鷄や又市は甲斐むすの
美水や年ふれた時乃人より
と初春鷄のこ枝せん付る

辨極のそ影をてくひしりあまのよ
初と觸衣去のうらまふれた花のあひ
不のをあてしと

何れをわぬ國いさくくや後壽草

東嶽山のくくくく根をとりくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

聖代

初鹿者柄の極くしかくくくく

入日

若菜そくくくくくくくくくく

沃土の鉄もうくくくくくくく

猪母くくく山掘起をくくくく

削鉄

正月も鉄くくくくくくくく

梅

梅の香くくくくくくくくく

むりくくくくくくくくくく

咲くは梅とわくくの日教られ
待ふ縁ちきし和あよ白ふや梅花
三弦も橋穂時をうむ免の意
香ふは心くさきそりよの梅花
梅の香は介よふぬくぬ物と梅
卧籠梅
道くもけ木遠くやむ免の花

鶯

うらひすや月の早のといふは
鶯の初隈さうはを何言う那

春眠

鶯の中耳戸明ぬ初う那

柳

むいりてかきとをなす柳が
ま柳やうしく老のつぼさうり
いろちたそくさうら柳う那

縁をらまゝい言たうぬあふんか

お歌ふ川市ふあつまる柳か

唐新旅

馬借くかま候ノ、よくまをりり

大井川

落馬多や唐もあへは大井川

大和初御留別

うしろあもあみもをささ唐うさ

春日

南うう出さうもあへはおほろ月

駿河の玉より御一り此女の琴は

なる不辨一々

あさといふもあはれまうや春の月

雲の月様ひと技むろひあり

猫恋

我唐の老猫またをふれ

鏡月くいさあひひきれ猫の恋

おもひ森の尾は蛇もくらの横の糸

白魚 吾帆樓

白魚やそんゝとる火の凄くは
ふゝ魚や波まけの風なちうゝ

吾解

吾解やうゝくは百八十ち

余を

砂このまはねうゝま乃をうさか

春風

誰とあう待伽殿うゝむ春の風

まを

衆嘲能傘へあまうやま乃を

春風やあうつさんまを松の雪

まの雪初ま清く 飯名うゝん

風巾

きれ几巾の夕越ゆくやまのち山

海苔

此乃乾夕也〜海苔二枚

仲春

松栢と書て正月二月ノ那

神事一の物と不之けの二月式

紅絹裏のうつきをぬむ水田

等於山

等於山と云ふ山乃笑ひたり

雛子

阿茶子のや振とあり雛子の舞

たやこふのあふさ雛のほろり

雲雀

秋もすく〜雲雀のうといえり

菜の葉よ落〜雲雀のうといえり

蝶

梅木屋の〜蝶のうといえり

鳥の時にふらつてはは飛ぶ様

蛙

はらふまふらうと物まぐさの卵

亭子燈のあふうと時うらふ

のふ満よも荒く埴う乳

富士根方あう

畑うちや大坂内う丸えうこの

莖

人ふあぬれうらうのりー莖うま

池田の宿あう

先申のー徳井う摘う莖うと

菜花

菜の花よりけさ大和河内が

炉塞

炉あふふう二日けうぬあう

雛

三のぼるの細も雛の月秋ハ
はれくと月忍く立己成の雛

胡葱

胡葱や小冊子の小所り抱あのみ
めさつてやさう路ても 女文字

桃

桃咲や牛のうらもやまこあ

出代

おりのりや飛多井藤く 櫻町

花

長深さふ教よこそあま花さるを
花散るに承き日と成よりり
このそかりは花よきさむおのき
成佛の棺もくらんをまはるり

东叡山

そらきや世ふ子とてきて花切子

洛陽

余一首のぬ山やうー花のそら
傘さうーく加さうー花のみやこ

旧歌

お花よと花ようーうーうーの麻

深きえ政古墳

お花よと法の杖あり竹と

梅

ちる梅祿ちよる人お徳と死れ
お惜む老よふよとやちるは
表さうーく三味線強き人通

長山居

梅戸や腰まつけぬ猛く
日暮てはちものそのなり山さ
お巖お肌をくらくおそら梅
りふえり若又はりし霞は

麻衣の如月白日家を失ひたる時

ちと果てく穴をせとせしう 萩 櫻

擲濁 麻修ふく

縁の代は成て月とさるはく一多

美 結

美 結の小ち力をせくく 迹より

山 吹

山吹や旭結まうり 雲てゆく

山吹や月も影くく 沈めゆく

菖

山寺や一日あらし新ぼくし

乃 春

乃 春や一花うまふよまらる

復之部

更衣 鳥群と浴ぬま杖と曳く

いさ嶮城も白くまらるれ 衣うえ

財無忘と隣と一若婆ありよく果
てうをす徳山の持ふをまらめくその
涼切ちうり軍千余里の勞を忘る

先門の姥子用ありこゝもいへ

若紫

多啼く志何んある若紫哉

郭公

えぬ喜とこくれ歩けぬ不す

是ういふ多の思や何とさう

郭公一花の復をささ免けり

耳をさすけし牡丹よ郭公

釣く糸懶く出さるや

竹枝と藤とあそぶや

多新よ多まらさるり郭公

牡丹

明和九年四月廿日深川芭蕉庵
再真成徳の日吏宅翁十七回忌を
すまひ

死こゝろ牡丹を蓮のうて船り

白雪此を由りまゝく不らん哉
多きまゝくくき欄よ牡丹丸

青簾

瓜さ死と哀のまゝめや書すれ

杜若

何多所冠り恙せんかさのまを
幅越り使ハるまをにかきはるま

茄子

繼

一富士の隠るくうらやらの茄子

面白き妻あまき者や初からず

笋

笋と申り物ま竹のめじろ

竹の子やあふりせて亭をさり

鄭

大磯まで

鄭よ乳あまぬもうれし虎う衣

いとまはと是よりいんすりの飯

花神 葛城山人の詠よむむくと送る
柳の花やま場く乃待百篇

或人のものりふ女のそとる貝ふらふて
はかりとる魚の形とささく柳あり
小舟といふ柳は似ける是と然とをた

二層この花柳も燦一星は舟
一枝とゆひひとる花柳くれ

実櫛

実ささくそあせ頼りささ吉舟山

下園 煮塚

素子さへ齒音おそろく木下雪

和方浦

續り福る家ふの茂たし和方浦

後醍醐帝御廟

百官たきと低とや其木立

菅菴

水鏡

翡翠

環影を市にそよけきさうくし

菰草の奥と直ちうさ水鷄
蓮よ居く蓮不極をぬ翡翠
川蟬の風うゆるうとあひひり

後河内あまわりなる法子来子う若湯
の舎を言つれなる不為の一長あり

三崎うく飛ぬいん川苔結えれ
悠く平温白鳥の古及や苔結花

桐花

酒桶の脊中や目や相乃花

螢

秋ふふ尔露の末流むほとふ
傘さして螢結きや宵秋くれ
冥の燈乃新と川うさぬ螢
式
端午系うて

不とく時我も結きよ
考せりと女ももる
塊う那

五月雨

竹部と川虫おほく入りあり
水もこれや體穢しよるる
橋を漏るる暗し皋月面

田植

松小日をうしひ出しける
を里や二節一季ち田うへ
部よりしそ月より淋し田植

青田 高麻深ち

冬田とて青田小畑し
ま田えりし深寺張右部

田草 養竹

秋の来るる流るる人田草より
それ子競それふくくを
岩と出る嬉しきことし竹

鴉舟 照射 夕見牙

鴉つらひや船くねりひ捨小舟

新も鶉鳥成りてくまきく鶉飼ふ
祐成りけり衆悉く世ぬ照射りぬ
時致る山やまきなれとてりし般

蚊を

隠影おききく蚊も浅般なりぬ
蚊ありて後秋くく星の目秋に

白骨親

夏瘦のころやみさるる孫見えぬ

夏草

庚辰の暮秋をうらみて野々
南強吏仙の別荘ありらるは

杖きくさけ這き床屋とりぬ

昼うほや部くり換ふらるる

動るうやたあしくむきみ波の家

昼影やゆるう咲く悉く香

夕うほや空飛の目みは即菩提

藻花 瓦

藻の茎や際おさ水の中なう

夏草

其

ちしほあき瓜むく新のかけり
瓜畑やいさむくくとまよまら

氷室 祇園舎

六月を襦袢 初冬 氷室より
祇園舎や人をゆる焼の落衣

富士指 白河関

舌叔降宿如浴衣や富士より
片神を秋の風なり みる川まら

竹婦人

葦生やるぬらひ然と竹婦人
七符とも三符ともいふ竹婦人

團扇漬

おのころのうらさやとれを月
曇る 新たのしの雲を

まのまをかたしる白團扇
清の清より衣成るあむくと

我新ふん何の園の清水うれ
涼—さる子尋ちるり苔清水

家あり川中小流を流るる那
山依の波はしるしり流るる那

暑 市井

三味線より白のせきわ川さき

天津路より丹路までる暑あさう那

かゝる不招れは縁起小むらゝ愛小憐と屈
してハア味は舌赤まらねとも枕をさる
我居の夕アるんやまきとやあひのおふと

帷子やぬけえ風も川相なる

負徳翁旧跡名所口相寺

隻陰やちと雨傘のあぬ屋より

悼吏登翁

六月を経帷子より名跡くれ

一周忌画像拵

秋まらぬ人のぬけを泣日りと

三也忌

他人もたつと六月の紙子う那

石碑遠立

三伏の夏あさる石の虜の那

蓮 夕立

菅笠の類うゝ蓮のうゝとて
丹こもるハ系とそよ吹り蓮の花
申ふこらや地ハ喜田の藻をほく

納涼

血部と川水よくく 納涼りな
所の燈籠をくく 橋や夕まを
是代也佐枝のあゝぬすもくれ

七祇宮法樂

僧ふ他よりとて哀中をあらはす
幸祇川の流と流るねい

我影も殘り 流れく 祇涼

ぬらひ武隈の松ふりさる

系老も松のおりむ 下まらみ

河原

白浪よゝ烏帽子系せもや 河原川

秋之

立秋

流ゆく茅の橋よあゝけさの秋

海とありて 穢ふもさやけさ秋
阿けおのまきち又ふり一處あり

七夕 八日星

早や琴の里さく更り増居部
青月や書紙舟のこくくま

早や川の秋跡の異忘く陽田川
し舟とさく

星遊 一書此橋けよまやこ名
立琴も存せらるや早の二日 碎

秋草

あさくはやれまろくのや部とく
姨捨舟よろひあてり女節花
荒牧中子瘦るまをまへ

阿房宮賦をよむ

鬼灯や三子人乃 秋乃と急
招風紙直ら根よわる為う那

魏系 燈籠

月見れを人の教たりままなり

亡方の新美をむく

途火やあまのひあまをぬもの新
は客の懐はくもさそ又侍川も
燈籠の中くさむー揚燈籠

稻 蝨 鳴子

夕風やを寝もくこくは稲ひら

奥州野田玉川

追まきく蝨 耳を川子色
引めけく松の月夜や鳴子繩

安永山子 河内路をさるま

楠のよろいさせくはくしうま
人さよやあめのまか安山子うね

秋蝶 秋蝶 蜻蛉

飯をまを遠くあるなり秋の暁
乃小月まをさやあああるぬ秋のふ
葉外てあや さきうや わさく秋蝶
うこくあまの目さくおさくて蜻蛉

虫 旁

日暮るても時を御ちり虫の声
 眼を明を蓋森ちりりちの聲
 我影の聲りりちの聲やさうくせ
 何れまゝ寝ぬ法やきりくす
 人ちり命はありぬきりくす
 是れ来るまね指しりりりりり
おしまひて
 物旁やゆりりりりりりりりり

秋風 花折

秋風や人よりけの風 風のいそ
 秋の風 芙蓉の皴を見付り
 追剥り 秋ハあけらるる花折り

秋夜 須戸 露

宿借く森とあまらるる秋

流傍洲水

秋の水は富士を流し
あまらるる

喰くもろ七玉川や 鮎秋

上弦子種漢

あゝ波の深さあゝ流や子らさよ

農家は八十の老を嘆く

糸の秋梓あり何ゆゑ 舞可那

秋暮 潮見坂

舟々々海とけんえは 秋のうれ

暮云と川顔見え合せき 秋の暮

眠我と暮水はせき

木母ちと力ありなり 秋暮られ

象眉秋客と立りて 秋の暮

言帆橋

移る川帰帆さきと 秋の暮

言冠毛誠寺懐古

燈紙かきく何ゆゑ 秋のうれ

言 小鳥

二羽くとうきて 悲し居る川

初房也 平初よをを 秋の暮

連花やむらりあさる 松乃中

野如来く一荒見ゆ侍 野山うま

文殊き納

山麓や文殊の習志のむらりる

茂庫山

茂庫山の眠さまらすまきりる

芭蕉 柿 待宵

さきりくさるあまの稽籠くをきんか

深うねる我と引さくをきせりぬ

濃柿や代くのまあも 撰柿し

待宵やとと後くり 女昂る

良夜 二洲橋色撥石列莊十六夜

あつかりとす枝の稽やりあれ月

田舎まわをいそ

浮雲舟鳴子むらりるや 乃乃月

深川舟遺逸

川よとせ川もや月の友とをきんか

十人の舟見の友や松乃中

麻生

昔ふゆを非代の宿も月見哉
 松月や何ほくきも片々白
 名月やおらうつさうとぬへり
 名月ややせれおらうと雪お松
 名月や月より初より後もまじ
 危地峰々溪村の松乃月おき
 名月や焼せけを風もあつらふと
 一谷

ありとりの妻ある波や次子の月
 いさよひや園々あまる麻の夢

野分 相撲 秋多 新綿

岩端の鏡吹くあけ 世分哉
 ころり子や見る目のあまら撲とを

眠江亭

江戸の酒のそりふ 秋多うらふ
 里を今綿あつらふ死日和哉
 景

白菊や花のこぼれと菱の葉
襟巻の菊より喰入日知れ
ひとま下菱よりくはゆきくはせ
舌よりぬぬんよまこくは菊の酒

漢村を湯

魚の名も菊色とちよりのま

婆心公あそ

あゝ菊やあゝ結花よま

白さよも浮世の善悪や菊のせ

後月 尾越鴨

白魚結あゝこくこくやのち乃月
稲穂より星よはつちうり後の月
尾を越く命いそく鴨の巻

紅葉 尾

人あゝのぬくちあゝめちちうれ

流防秋ま

花よりもあ紫よまこくは淡く那
あゝのあゝ徳もまの屋よま七ま乃

春とりのさあり

春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり
春とりのさあり

あまのつゆのつゆ

あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ

麻 落氷 九月

あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ
あまのつゆのつゆ

綿 冬之部

冬之部

初時雨 小春

初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春
初時雨 小春

夜

夜
夜
夜
夜
夜
夜
夜
夜
夜
夜

傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨
傘 初時雨

組所 冬の忌日くくを小まきり
糸を踏まふちりく晴む小春外

後河の人々よまらぬ時

身まじりの産やまじりく 小まきり 風

芭蕉忌

百回忌を七十年の今月小まきり
保川安持はまは源遠まの折るく知上
人の死の陰まて我死んと後せまか
おもひゆき

我移り小まきりの年や 十一二日

後河路やまきりも糸の白ひとわたり
桃舟真なり真りわたり

まやみもや飯をゆくりの茶も深ん

掛川より端れる布をまひく

冬枯や人共ハ葛花 居士あろも

新冬

まひ一匹の眼おり方や石落の花

十月のめくふそくや花もまら

ちくまて罪ちとさ菴の干菜うま

枯柳冬牡丹枯花 鶺鴒 冬菴

枯く月を柳の渡ぬう那

妻ぞくは始めも戸や冬月へん
るともんく一里ハあくるり枯井もく
えぬめつよお捨せんみ我くさくお
おふひうひて月さふ出さう冬筆
帰花 火桶 巨魁 とうじ 珠巾
妻ぬとありふ日もあり 為と花
あは初くうくも白く 帰花
こわれ居る官女の中よ火桶る

極楽地をへふと也 こと川のあ
風やこくじし焚くく志のさりも
子鳥鳴うくう月夜の珠巾る
相二重の系よ暖暖ある紙衣
熱き氷炭 掃火 水鳥
顔よせや世よを寺に鐘の聲
橋をへ橋るりりて雲衣うた
鴨をー教寺の池いはとやて

賣よりも買人きく 炭二并

身延七面山より

楳の火や祖師の胡座も眼結のそと
まろし一程歌あもそくひ乾鴨の飛

千鳥

押分て月こそゆれひしちとを
まをあらもちるおあまそく濁うれ
蛤耳るくくくくと子とらふ
うとくたよ居れをこぼるうひく濁

雪途中吟 雑扣

まろくあさ火よあさうらり秋の雪
島市と八百屋さうまそや夜の雪
義松そむそり湧きり雪の友
まのうき飯らふ雪のちとけ

傍ら對せ

掃よせん君いさほくまし雪を連片
習り入とおりふ雪もあり雑こき

秋死 四 春

と年ありて裁えまきなり衣 碓り

年内を春

ふとくもまふももるる柳哉

年忘減来る旅の本あるより

年日なき日の事とされりる

春の日せかりて折るやとまふ

光陰を知らぬ

かくて世を離れくるたうり年の昔

年波の流とまきもるんあつてけ

起されくもんれも栗蕨作をて

酒肆ハ舞ハいとぬやう葉舞ハ舞ハ舞

志けしと作を交のさけしとれ

鼓をと浮世かきくむらりのこれ

節分 宝船

大夏売よ七歩の吟や船をい

空のふらふらと入るるあつて

中の葉のあり浮をふとさるる

舟をさるる

義堂より 舟の換とよあつて船

三芳野は旅森しそく花の令衣の下卧せ
妹山脊山の侍もやのわさうまさう縁を
橋本と急しそく又や古くそく

基依の風流とつら美媛の花持て
とつら

質よとく物なり月あり年結者
東方未明衣裳轉倒

祐成と縁若く出たり子のえ

